

HYOGO

ひょうご Network

この人あり

研修を終えた長尾は大阪大学医学部付属病院第二内科で臨床と消化管ホルモンに関する研究に没頭した。その後、内科医長として市立芦屋病院に勤務。内視鏡検査と臨床研究に明け暮れた。

そんな忙しい日々を過ごしていたときだ。長尾の人生を変えるきっかけとなる阪神大震災が起きたのは。

平成7年1月17日早朝、長尾は神戸市灘区の老朽マンションで、激しい揺れにたたき起こされた。「六甲山の神様がむちゃくちゃに怒っている」。瞬間、「乱開発のつけが回ってきた」と直感した。長方形の部屋がひし形になってしまった。死も覚悟した。約2時間かけて歩き、やっとの思いで芦屋病院にたどり着くと、院内は次々と運び込まれる負傷者でまるで、野戦

## 長尾クリニック院長 長尾和宏さん ㊦

病院。だった。心臓マッサージや点滴処置、傷の応急手当など懸命の治療が行われる中、長尾も無我夢中で治療に当たった。

倒壊家屋から掘り起こされた人の鼻や口には土が詰まっていた。家族のすがらような願いで、無理と分かっているも死後、数時間たった人に蘇生措置を試みた。

何より辛かったのは幼い子供の死だった。今まで何百人もの臨終の場に立ち会ってきたが、幼児の死に接するのは医者になって初めての経験だった。

「病気でも何でも無い、神様のいたずらによる死。自然災害とはいえ、何とひどいこ

## 命救った「個」の判断

とをするんだ」。強い怒りと悲しみに涙がとどめなく流れた。

こうした経験の中で、長尾はある事実気づかされた。



阪大第二内科時代の長尾さん。臨床と研究に明け暮れた(本人提供)

「カーによる患者の転送を即決したという経緯があったのだ。

大震災という非常事態の下、対応が後手に回りがちな「公」ではなく、「個」の判断が組織を動かし、多くの人の命を救った。長尾は実感した。「個人の力は大きい。組織ではなく、個人が動かなければ世の中は変わらない」

それは勤務医の限界を感じ、開業へと意志を固める動機にもなった。

震災発生から半年後の7年7月、長尾は11年間の勤務医生活にピリオドを打ち、阪神尼崎駅近くの商店街の雑居ビル2階に診療所を開設し、外来診療と在宅医療への取り組みを始めた。

「病気だけではなく、人間(全身)を診ることが出来る医者になりたい」

学生時代から抱き続けてきた夢の実現に向けた第一歩だった。

だが、その歩みは順風満帆とはいかなかった。

(敬称略)

芦屋病院では、收容能力をはるかに超える入院患者が病院内にあふれ返る中、死に直面した重症患者を大阪市医療センターに救急転送し、大勢の命を救うことができた。その際には、ボランティアとして救急処置に加わっていた一人の開業医の直訴で、医療センター救急部長がドクタ